

E-1 湯のみ茶わんの意匠に関する人間工学的研究

奈良女大家政 ○前田 正子
梁瀬 度子
花岡 利昌

1. 食器の人間工学的研究は、ティーカップやポットについていくつかなされてきているが、今回は、日本人の生活の中で日常茶飯事となっている、湯のみ茶わんを対象とした。茶道の普及以来その茶わんは、形態、意匠の面で、優れたものを数多く生みだしてきた。そのことは、ふだんに用いられる湯のみについても同様のことが言えるであろう。そこで我々は現在使用されているもの及び市販されているものの中から、約80点の茶わんについて、人間工学的配慮が、いかになされてきたかを追求すべく、実験・計測を行なった。

2. 形態計測に基づいて、茶わんを9種に大別し、各群について湯のみの高さ（内法高）の5～6割水を容れて飲み、それを100コマ/分・8mmフィルム撮影し、飲みはじめから飲み終るまでの茶わんと顔の傾斜角、それに要する時間を分析し、合わせてもちやすさと飲みやすさについて官能検査を行なった。

3. 一般には、湯のみの高さの5～6割水を容れるのが常であり、この状態で茶わんを傾けた場合、水ではじめる角度は、丈の低いものから順に大きくなり、出終る角度は特殊な形態のものを除いては深さに関係なくほぼ同じである。茶わんの内口径寸法は、最小49.0mm、最大99.0mmであった。前者は、人間の鼻と口の距離に、後者は手の大きさに規定されると推定され、生活器具の中で、人間工学的配慮のなされた例として興味深い。